

同志社中学校

リベラルアーツの伝統を基盤に
未来を創造するイノベーターを育成



レゴや作品、標本や教材が所狭しと並び「メディア・スペース」は、まさにそこにいるだけで学んでしまう環境

創立者・新島襄の「自由・自治・自立」の精神を受け継ぐ同志社中学校は、創立148年を迎えた。伝統と進取の気風に富む同校は、すべての生徒たちの知的好奇心・探究心を育むことを目的として、校舎に近畿で唯一の「教科センター方式」を採用。これと融合する形で先進的なICT教育やアクティブラーニングを展開。グローバル化が加速し、大きく変化する社会を見据え、伝統のリベラルアーツ教育の上に、新時代を切り開く学びを創出している。

【同中 学びプロジェクト】ノーベル賞が生まれたスーパーカミオカンデ訪問(東京大学宇宙線研究所)

未来への学力を育む 世界標準の教育環境

キャンパスは交通の便がよく、京都駅から地下鉄で20分の「国際会館」駅前に校門がある。京阪神はもちろん、名古屋や姫路方面などから新幹線を利用して通学する生徒は30名を超える。アカデミックな赤レンガ造りの校舎が10万㎡の広大な敷地に並ぶ。その中心にはグレイスチャペルがあり、日々の礼拝を通して、生徒たちは静かに自己と向き合う。人格の成長を促し、これからの人生の指針を得る大切な時間となっている。

校舎は、欧米の学校では一般的な「教科センター方式」を採用しており、理科や技術だけでなく、すべての教科に専門教室を設けていることが最大の特徴だ。さらに教科ごとに「メディアスペース」を配置し、教科に関連する資料や生徒の作品を多数展示している。理科の標本館では、カバやワニなど約8000点の標本・剥製を所蔵し、100年以上の理科教育の伝統を感じながら学べる。「数学博物館」には、定理パズルや数学アートなど、さまざまな数学を体感できる工夫が施されている。まさに、「学校に入ると、その空間に浸るだけで学びたくなる」環境が整っている。

近年さらに力を入れているのが、「同中 学びプロジェクト」である。これには、大学の研究室や企業への訪問プログラムやアントレプレナーシップをはじめさまざまな講座、ワークショップ、実験・工作、フィールドワークなど、バラエティーに富んだ内容

が用意され、コロナ禍によるオンライン活用の拡大も受け、その数は年間300を超えている。例えば、京大IPS細胞研究所ではDNAを抽出する実験に取り組んだり、東大スーパーカミオカンデ見学ツアーでは、ニュートリノとその検出の仕組みを学んだり、東大理学部では、宇宙研究の基礎の特別講義を受けたりする。

学校の教室での学びを超えたこれらの体験は、生徒の知的好奇心と探究心を刺激し、自分の無限の可能性に気づく機会でもある。卒業生の進路は、同志社大学はもちろん、京大、東大などの国立や医療系の大学など多岐にわたる。

校内のICT環境は全国でも最先端を行くもので、視察が絶えない。生徒は、日常の学習課題の保存がされている「学習ポータルサイト」を利用するだけでなく、導入10年となったiPad一人一台環境を活用して、学びの世界を広げている。例えば英語の授業では、自分でテキストや写真・動画を作成し、編集しながら英語でプレゼンテーションをしたり、オンラインによる海外のネイティブ講師とのスピーキングにもチャレンジしたりする。また各自テーマに沿ってフリーライティング(自由作文)を行うなど、英語の4技能を総合的に育む工夫を取り入れている。こうした設備や教材の構築は、コロナ禍を通じて、学習内容に応じ対面とリモートをハイブリットさせることで、より豊かな授業を実現させている。

言語を超えて 自分の意志を伝える力を

グローバル化の進展や人工知能(AI)の発達により社会の枠組みが大きく変化し、予測不可能な時代を迎えている。「これからの社会に真に必要な学力とは何か」という問いから、教員も新たな取り組みに挑戦している。例えば、技術教育の「STEM(STEイム)教育」は、科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、芸術(Arts)、数学(Mathematics)の頭文字をとったもので、各教科で学んだことを土台に、モノづくりや問題解決の道筋を探るものだ。単にモノをつくるのではなく、どのようにしたら世の中に貢献できるかを観察し、洞察し、より深いレベルで人や社会に共感することでアイデアが生まれる。まさにIT技術、AIの発達に伴う、第4次産業革命の真っ只中にある私たちに必要な力である。「観察」「洞察」「共感」は、デザイン思考の基本能力である。この実践は、1年間「毎日小学生新聞」に掲載され、注目を浴びた。

られ注目を浴びている。例年夏には、ArtE.C、香港の教材会社の協力も得て、本校を会場にASIASTEMAMCAMPを開催している。毎年実施している韓国・台湾との交換研修では、教員・生徒が互いに訪問し合い、一緒にモノづくりに取り組む。また、インドやフィリピンでも訪問授業を行った。文化も母語も異なる人々と英語を用いて協業する、まさにグローバル社会で求められる能力を伸ばす絶好の機会だ。

「教育に国境はありません。生徒たちがグローバルな環境でアイデアを出し合い、協力して一つの課題解決に挑む。アジアの国々との協力プログラムでは、英語も用いながら、相手に自分の考えを伝える体験ができる。それが未来に生きる力になるのです」と竹山副校長は語る。その他の国際交流も盛んで、カナダやアメリカ、ニュージーランドへのチーム留学、アメリカや韓国・台湾との短期交換留学、さらにはハーバード大学やMITでの特別講義の受講ができるものもある。また、国内でもハーバード大学生とのイングリッシュキャンプ、国際教養大学への研修など多彩なプログラムが用意されている。



【国際交流プログラム】アメリカ、ハーバード大学の研究室を訪問し説明を受ける同志社中学生

キリスト教主義を徳育の基盤とする同志社中学校で、生徒たちは礼拝での講話や学校行事を通じて互いの違いを認め、他者を思いやり、協働する共生力を身につけていく。その最たるものが学園祭の演劇フェスティバルである。興味や関心が共通する生徒が集まるクラブ活動と異なり、中2から高3までの全クラスが、それぞれの舞台を造り上げる。考え方や目指すものの違いを超えて、協力しなければならぬ。まさに今話題のプロジェクト型学習そのものである。仲間との話し合い、試作、そして挫折、解決への努力を通じての克己心やリーダーシップの萌芽など、組織で活動する資質が自然と育

まれていく。卒業生は異口同音に、「この経験がさまざまなソーシャルスキルの原点になった」と語る。

生徒会やクラブ活動は、中高で分かれて活動しているため、中学3年生で一度、最上級生になり、さまざまな場面でリーダーとしての役割を果たさなければならぬ。一人ひとりのリーダーシップの育成が一層求められる時代に、より早い段階で主体性が育つ環境がここにはある。自らの資質を高めるという点で、他校に比べて人間の成長が早いと言える。

生徒の約9割が推薦で同志社大学に内部進学するが、他大学への進学実績も有する。大学入試改革がさまざまなかたちで進められる現在、2030年から2050年代に社会人として活躍する生徒たちにとって、将来幅広い選択肢が可能であることが学校選びの重要なポイントになるだろう。



竹山 幸男 先生

「言語を超えて 自分の意志を伝える力を」

ソーシャルスキル育成の原点は 中高時代の演劇(総合芸術)を通じた学び

同志社中学校では、リベラルアーツ教育の理念を生かし、特定の分野に限って学ぶのではなく、さまざまな分野に関心を広げて学ぶことで、成功体験を増やし、チャレンジ精神を育成して

DATA

- 代表 竹山 幸男
- 住所 〒606-8558 京都市左京区宝ヶ池
- 電話 075-781-7253
- 交通 京都市営地下鉄「国際会館」駅前 徒歩すぐ(駅出口に校門が直結) 叡山電鉄鞍馬線「八幡前」駅より徒歩5分
- 生徒数 876名(男女共学)
- WEB 同志社中学校

教育問答

副校長 竹山幸男 先生

同志社中学校・高等学校

リベラルアーツの本質を問い

これまでの学校の「普通」を

超えていく教育を創る

「大学合格実績は？」「取得できる資格は？」など、私たちはともすれば、教育に目先の成果ばかりを求めがちです。しかし、教育はそれほど単純なものではありません。教育の本懐とは一体、何なのでしょう。同志社中学校・高等学校の竹山幸男副校長をお迎えし、いま一度、その原点を問い直します。



プロフィール

同志社大学法学部卒業。1992年度より社会科教諭として同志社中学校に勤務。2010年度に同志社中学校・高等学校副校長に就任。

リベラルアーツの本質である自らを自由にする学びを

——厳しい校則もなく、制服もない。「自由」な校風で知られる貴校ですが、なぜ「自由」が大切にされてきたのか、その背景からお聞かせください。

まず、本校の教育における「自由」の意味について考えてみます。確かに制服がないことは、目に見える「自由」の一つですが、それは本質ではありません。真に大切なことは、そうした物理的制約の有無ではなく、「考え方や思考が自由」であること。「創造力や発想力は、何事からも自由で自立した個々人の頭脳や心から生まれる」。主体的に創造的に考え、決断し、解決できる力を持つて自らを自由たらしめる学び——リベラルアーツ教育の伝統が、本校の教育の本流にあるからです。

狭義のリベラルアーツは「一般教養」と訳されることも多いですが、単に知識の習得を指すものではありません。人が精神的に自由であるために身につけるべき人生の指針、そして今後さまざまな分野や場面で応用できる広範囲で深い教養と、それを支える素養の育成こそ中等教育におけるリベラル

アーツです。創立者・新島襄先生が掲げた「自由・自治・自立」の精神も、まさにそれらを備えた人物の育成に根ざしたものでした。

余談ですが、新島先生は海外の大学で学位を取得した最初の日本人であると言われています。言い換えれば、わが国の「グローバル人材」第1号であり、リベラルアーツの体現者であったのかもしれない。

——その理念に基づいて、現在の中等教育全般に対して感じることや、懸念することなどはありますか？

諸外国に比べ、日本には同じような学校が多いと感じます。科学習か特別教育活動（クラブを含む）の二選択という感じで。その先の大学進学についても、「入試を突破する力」に重点を置きすぎている気がします。

もちろん、それらも大切ではあるのですが、「学び」の本質は本当にそれだけのものなのかと思うのです。「学ぶ」ということはもっと豊かで、そして深く、広く、あらゆる可能性と未来を生み育てるものではないかと。

そして何より中等教育期は、そういう土壌を「耕す」時期です。しかし、現在のわが国の教育的価値観は、あまりにも拙速に学びを完結させて、表面的な結果を求めすぎているように見えます。「これを学べば将来役立つ」とか、「この成績だとこの大学に行けるのか」という具合に。

海外の進んだ教育事情を知るにつけ、そのような結果を求める学びだけでは不十分であると皆が気づき始めています。だからこそ中等教育ではもっと可能性を広げていく学びを大事にしていかななくてはなりません。「これを学べばすぐにこうなる」ではなく、寄り道や少し無駄を感じるような「余白」がある学びや経験がこれからの時代ますます大切になってきます。それが、リベラルアーツ教育の精神ともつながります。

「学校」とは？

その存在意義を改めて問い直す

——そのようなりベラルアーツ教育の実現のために、大事にされていることは何ですか？

先ほど「日本は同じような学校が多い」と申しましたが、どれだけ「普通の学校」という枠を超えられるかを考えています。かつて新島先生が学んだアメリカの大学は、リベラルアーツ

レッジの最高峰と称された学び舎（アマースト・カレッジ）です。そこで新島先生が見てきたもの、受けた衝撃を現代の子どもたちにも届けたい。そのような思いを抱いています。

もちろんそれは、何か変わったことをして目立てばよいという意味ではありません。もう一度、改めて学校の存在意義を問うかのような学校づくりをしたいですね。

——「普通の学校」を超えているところを具体的に挙げるとすれば？

いくつかありますが、キャンパス、校舎の空間構成は特徴の一つでしょう。多くの学校は「限られた敷地に校舎と校庭があるだけ」であって、真のキャンパス（学びの空間）にはなっていないように感じるので。

「空間が人を育て、建築が学校をつくる」。比叡山を望む地で、緑の木々に囲まれたレンガ建ての校舎は、まさに私たちの夢が実現したものです。キャンパスに入った途端、日本の学校とは思えない別世界に足を踏み入れた感覚となり、誰もがこのキャンパスに憧れを抱きます。コロネード（回廊）やヤード（中庭）も点在して、アカデミックな大学や伝統ある街並

校内にはまるで博物館のようなスペースも設けられ、はく製や全身骨格、標本などが所狭しと並ぶ。



みを感じさせるようなキャンパスです。また、本校では、全国的にもめずらしく、近畿の私立中学では本校のみという「教科センター方式」に基づいて教室をレイアウトしています。これは、教科ごとにエリアを設定し、そこに教科専門の教室を置く配置のこと。つまり授業ごとに生徒が教室を移動する方式で、教員が待つ教室に生徒がやってくる国際標準のスタイルとしました。

各エリアは、教科ごとの学びを行いやすいように設備・環境を整備し、すべての教科エリアに教室と隣接した「メディアスペース」と「教科教員室」を配置しました。「メディアスペース」は、教科関連の資料や書籍、生徒が作った作品や発表物などが並んでおり、自由に使えるワークスペースも設置。疑問に思ったことをすぐに調べることができ、発展的・探究的な学びにつなげることができるようです。また、「教科教員室」を置くことで、授業を担当する教員はもちろん、それ以外の教員にも質問できるようなっています。教員同士の研鑽や情報交換もしやすくなりました。

ケーションなども活発に行われています。学園祭でのクラス別演劇は50年以上の伝統があります。

生徒が主体的に学び、「教室だけでなく、校舎やキャンパス全体が学びの場」、生徒と教員が共に学び合う「学びのオープンスペース」になることを目指しました。

そもそも学校の建物、もっと言えば学校という「器」はなぜ必要なのでしょうか。今の時代、インターネットとパソコンさえあれば、いつでもどこでも学べます。極論すれば、学校に行かなくても知識や情報の習得はできるのに、それでも学校へ通う意味とは何か、ということですね。これについて私は「相互に学び合えること」と、「さまざまな出会いと経験の場」だと考えています。

繰り返しになりますが、現代の学校はあまりにも機能性や合理性を重視しすぎている気がします。日本社会が、そういう学校を「作ってしまった」と言えるかもしれません。しかし、学校は「人を育てる場」です。だからこそ、「学習舎」となるような人にやさしい環境、そして仲間を大切にしたいですね。

本校には、チャイムがありませんので、移動の際も、自分でタイムマネジメントして動く必要があります。



す。「学びを自分で創り上げ、自ら学びに向かう」という考え方で。学びにおける「自由」とは、そういうこともつながっています。

世界・社会とつながったシームレスな学び

授業やカリキュラム上では、どのような特徴が挙げられますか？

中学・高校を通じて、コースや理系・文系の区別がないことで、幅広い学びの機会や経験、「本物」との出会いがある方が伸びしろが大きくなると言われています。

『同志社中学校（以下、同中）学びプロジェクト』は本校らしさの一つですね。一般的には高校生が取り組むような内容も含めて、中学生が学べるようなしくみにしています。できるだけ早い時期に、知的好奇心・探究心を刺激してあげたいからです。そのラインナップも実に豊富で

個性的です。たとえば「京大iPS細胞研究所でDNA抽出」「東大スーパーカミオカンデでニュートリノ検出実験見学」といった最先端技術に触れるものから、「企業と一緒にアプリ開発」「ドローン操縦でVR高所作業」などの企

業連携、ほかにも「プロジェクトショウマッピング制作」「地質調査」「地域活性化」「文化継承」、あるいは「陶芸」「シルクスクリーン」などのアート系まで多種多様。内容は毎年異なりますが、年間400に及ぶプロジェクトが用意されており、生徒たちはその中から自分が興味のあるものを選んで参加します。一人でいくつものプロジェクトに参加する生徒もいますし、近年は『同中 学びプロジェクト』に参加したいから本校に入学したという生徒も増えてきました。

これとは別に、夏休みなどの長期休暇中には「自由研究」「自主製作」に取り組む伝統があります。『同中 学びプロジェクト』ではあらかじめ設定されたテーマの中から選びますが、こちらのテーマ設定は完全に自由。自分が知りたいことや、やってみたいこと、作ってみたいものに打ち込み、3年生は全員がポスターセッションの形で成果を発表します。

生徒から出てくるテーマはやはり斬新かつユニークです。たとえば自由研究では色彩をテーマに「企業のロゴマーク」を分析したもの、人間が目視できる限界距離をテーマに「水平線・地平線までの距離」を検証したもの、

自主製作では「バリ島のオリジナルガイドブック」「高性能オーディオアンプ」から、果ては「食べた鳥骨による骨格標本」まで「なぜそれを選んだの?」と思わず唸ってしまうものばかり。しかしそれこそ、子どもたちが本来持っている学ぶ意欲の芽であり、リベラルアーツの原点なのです。

本校のように幅広い学びができる環境があることは、ここにもよい影響があると感じます。システムチックに最適化された、換言すれば「お膳立てされた」環境の中だけで学んできた子どもたちは、いざこうしようとしたとき、自分の中から「なぜ?」が出てきにくいようです。「自由を選んでいいよ」「好きなことを調べてもらえ」と言っても、何をやらればいいのかわからない。「問いを立てられない」のです。学校としても毎年、新入生一人ひとりの皆さんと「テーマ探し」のための面談を行い、サポートをしています。

「学力」を再定義し 真に生きる力を育みたい

——自分で考え、学びに向かう姿勢が大切なのですね。

ガイドナーの多重知能理論によると、「知能」は8つの要素に

分けられるとしています。しかし、これまでの中等教育は、このうち「論理・数学的知能」と「言語・語学知能」を中心に「学力」を捉えてきた傾向があります。本当は、「対人的知能」、「博物的知能」、「視覚・空間的知能」、「内省的知能」、さらに「身体・運動感覚知能」「音楽・リズム知能」のすべてが、人間が成長するために欠かせない要素です。

戦後の高度経済成長期など、与えられた仕事を疑うことなく、そしてソツなくこなす力が重視された当時の社会構造では、それでよかったのかもしれませんが。しかし時代は変わりました。何が正解なのかわからず、前例もなく、その状況の中で解決策を見つけ出す力が必要です。「Education2030」やSDGsなどの影響を受けて、日本の学習指導要領、大学入試の変わりも進められてきました。

一人ひとりの多様な幸せ (Well-being)、主体的に考え行動していく姿勢 (Agency) を育む「学習者主体」の教育は、まさに、創立者・新島襄先生がめざしたキリスト教主義教育とも合致します。新島先生の教育理念の先進性、漸進性が、今輝いていると言えます。

フィールドワークや研究室の訪問など、本物の学びに触れ、好奇心を刺激する「同中 学びプロジェクト」。

